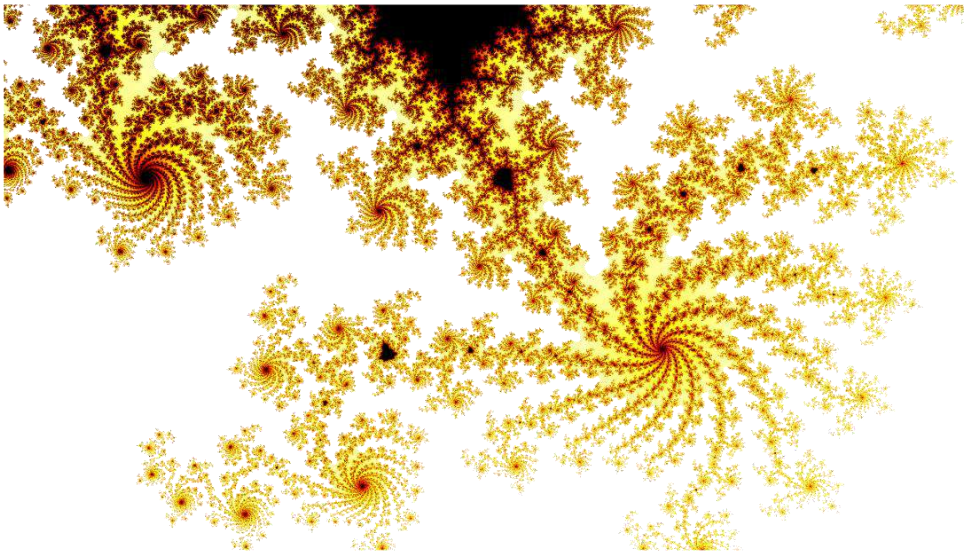
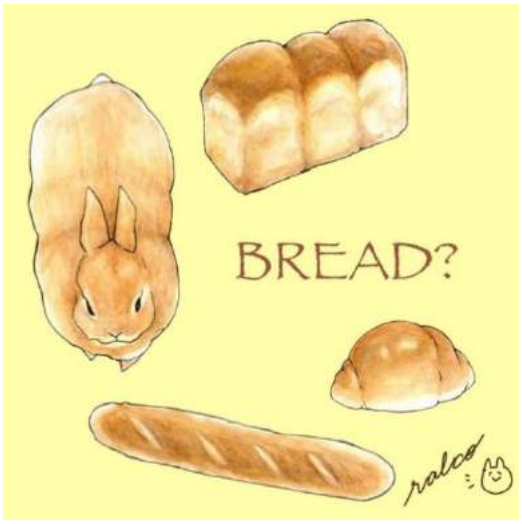
# ジンジンある

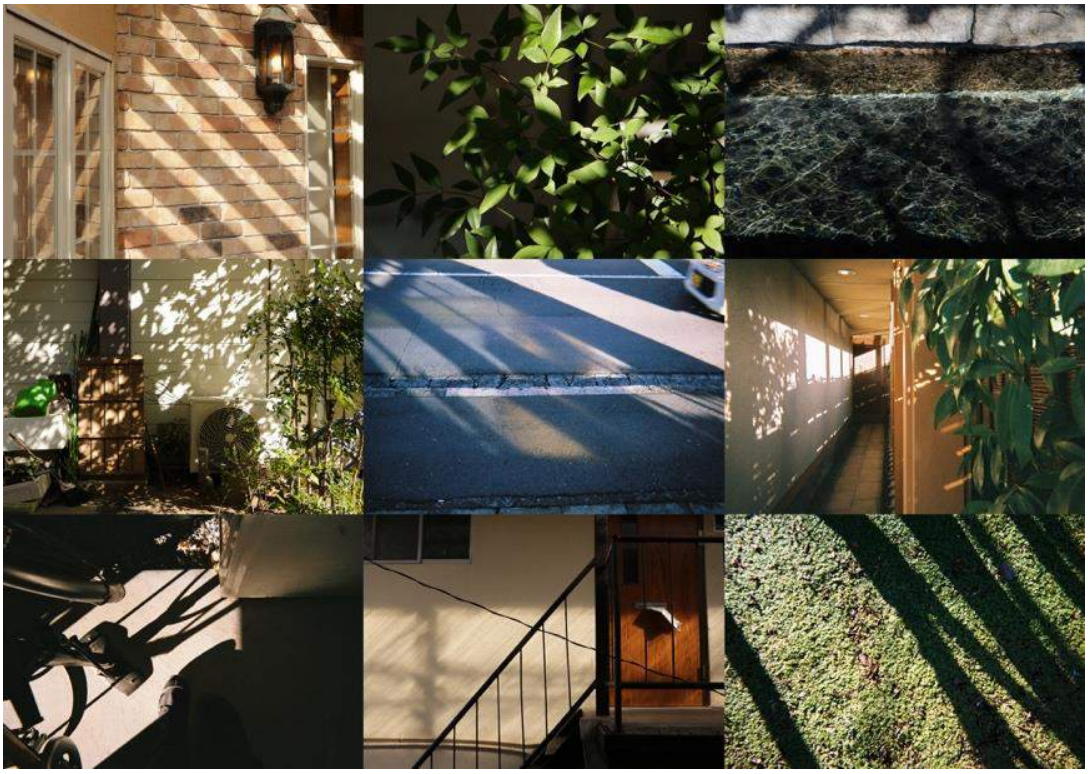
# ZINE 5



らる子




http://coral12k.wixsite.com/ralriru



# 守口駅近くの木の温もり溢れるカフェでゆっくり

京阪守口駅を出てパチンコ屋さんやこっそり佇む古本屋の看板を通り過ぎ、一分ほど歩いたところに、三階建てのカフェがある。

僕の知識不足で名前は知らないが店前にも黄緑色の葉っぱの絨毯に覆われた身長百センチくらいの木があり、店内は歴史を感じさせる木造の建物の、自然と一体化したようなカフェだ。

そこは昼時以外いつも空いていて、利益が出ているのか心配だ。少し予測計算してみよう。健康に良さそうな日替わりランチにコーヒー・紅茶と手作りシフォンケーキのセットがゴールデンウイーク明けに値上げされて千二百円。日替わりランチはいつも完売している。いつだったか三時頃に行ったら日替わりランチが売り切れで悲しい気持ちになった事がある。その時に、伝票なしでも誰が何を頼んだか覚えている店長から日替わりランチを何食用意しているか聞いた気がするが、忘れた。以前、備え付けのベージュのティッシュに「いつも美味しいランチをありがとう」と、スケッチを描いて残した事も覚えてくれた店長には申し訳ないが、僕は忘れた。多分、二十食くらいだろう。食事メニューはあとから揚げランチだけで、あとは頼んだことはないけれどデザートやお茶の種類が豊富だ。一度くらいは頼んでみようと思ってはいる。

他のお客さんが五人くらい来てデザートや飲み物を平均八百円分頼むとすると、一日で二万八千五百円の売上だ。これに三階イベント会場の貸出しによる収入を月三万二千円と仮定する。店長が一人で切り盛りしているので追加の人件費はなく、食材（販売金額の四分の一）・水道光熱費と家賃（仮に十五万円とする）を引いても月三四万四千円の税引き前利益になる。どうやらなんとかなっているようだ。

ああ、これで安心して、何時間でもゆっくりできる。

二〇一七年　六月　十四日（晴れ）　骨ゆん

Foranapple and lighter nure

sin

# KAIKI KIMIWARU OBAKE

あわれ きみわる　腹のゆ

きみのくさった卵

きみわる おばけ だぁー

おまけまんが
怪奇 きみわる おばけ

やったね！ 怪奇シリーズ

ぐー

ん…

イタイ イタイ

お腹がいたい…。

…とまぁこの始まり。
と・こ・ろ・が

おっ たまご だっ！

年を経た物には
魂が宿る…
と言われて
おります

ピシ

が…　この卵

あっ、古い物には
気をつけましょう。

というおはなし…

しゅう

それ程、長い年月を
経た訳ではありません
それなのに なにを
迷ったのか

おばけだ

OOPS!

目玉やきに
されて
しまいました

ウヒョ
ウヒョ

新地学

## 140 字小説

五分の間彼は海になった。悲しみと怒りが詰まった街を、押し流してしまえるような海になりたかった。それでも、彼がなれたのは小川のように小さな海。行き場のない青い液体が前へ進む。暗い無人の街路。犬の遠吠えが響く。突然元に戻った。彼が通った翌朝にコンクリートにたんぽぽが咲いた。

## Micropoetry(超短詩)

a lark
dissolves into
the blue sky
he returns to her bosom

訳　ひばりが青空の中に融けていった
　　彼女の胸の中に帰ったのだ

### あたたかくて、大きな手

祖母は祖父と別れた時のことを何回も話してくれた。祖父は戦争に行って、フィリピンで亡くなった。遺骨は帰ってくることなく、祖父の徽章だけが軍から返還されたそうだ。
祖父は出征の前夜にずっと祖母の手を握っていたそうだ。
「あたたかくて、大きな手だった」と祖母は何回も言った。横になって寝ている間も、手を放そうとしなかったそうだ。もしかしたら、眠れなかったのかもしれない。祖父と祖母のまわりには、子供たちもいた。10歳以下の女の子だ。その中の一人が、私の母だ。母は祖父が出征した時のことをよく覚えていなかった。まだ5歳だったからだろう。母の姉は、その日のことを覚えていて、泣いたと教えてくれた。
私は祖父に会ったことはない。それでも、祖母から繰り返し祖母のことを聞いたので、頭の中に彼のイメージが出来上がっていた。子供の頃は祖父の悲しみを考えたことはなかった。それでも、年齢を重ねるにつれ、祖父の胸の内がなんとなく分かるようになった。
妻と小さな子供たちを残して、出征するのは苦しかったに違いない。しかし、祖父にできることはない。国家の命令に一個人が逆らうのは不可能に違いない。妻の手を握り締めることだけが、彼にできることだったかもしれない。祖父は子供たちの寝息にも耳を傾けただろう。その時どんな気持ちだったのだろうか。
祖母は遺骨が返ってこなかったので、祖父はどこかで生きているのではないかと思っていたようだ。夜中に物音が聞こえると、「おじいちゃんが帰ってきた」と言うことがあった。夏休みなどに祖母の家に泊まった時に、経験したことだ。その時は子供ながらに、祖母のことがかわいそうで、胸が痛んだ。
祖母は私が20代の時に亡くなった。知らせを受けて、病院に駆けつけると、祖母は人工呼吸器をつけてベッドに横たわっていた。おばあちゃん子だった私は祖母に駆け寄り、手を握った。意外なことに祖母は強い力で、私の手を握り返し、何かつぶやいた。祖母の声は聞き取れない。その時に、繰り返し聞いた出征前の祖父のことを思い出した。祖母は祖父のことを思い出したのだろうか。もしかしたら、私を祖父と思ったのかもしれない。

えぐりとった夕焼け

降り出したロリポップとゴ

ような蝸牛

「嫌だ」

「きらいきらいきらい

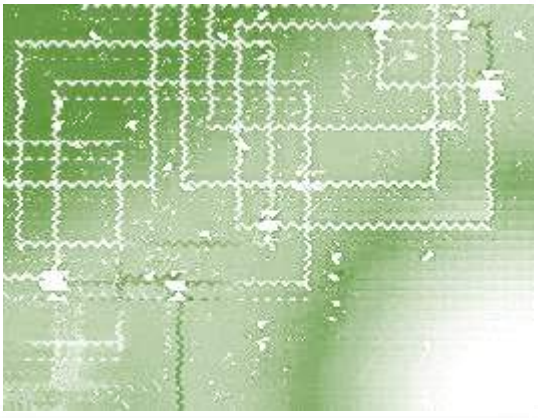
取れた指先を蛍が吸う

朋 @

# 待ち合わせは 10 数メートル先で

文那

ひたすら走れば何かがわかると思っていた。
空港に 16 時に到着すると彼女から昨日 LINE があった。いつものように乗ると返信があると思ったがそれもなく、待ち合わせの 16 時を 1 時間弱過ぎていた。
　何かあったのだろうかと腕時計を眺めるが、眺めたところで彼女が来るわけでもない。人のすれ違いはほんの少しの綻びから始まることはわかってたが、ここまで返信が来ないのはさすがに身に応える。
　仕事の休みがお互い合うのはほんの月のわずかで時間も不定期だからろくに電話もできない。
　---私のことなんて何とも思ってないんでしょう
言葉で言われるよりもずっと文字の方が胸に刺さった。
　でも、彼女が来ると信じてる。いつもの待ち合わせの到着ロビーにはいられず彼女がいそうな所へ走り出した。どこにいるのかは何となくわかるがそれでも見当違いな方へ走りたかった。間違っていても遠くても、信じるということを確かめたかった。信じるということは確かな形がない。形がないからこそ人は不安になり確かめたがり、押し付けて時には大切な誰かを傷つけてしまう。
　スーツ姿の人の中家族連れの中を駆け抜ける。
　彼女にあったら幸せになんて誰にでもなれると伝えたい。泣いてきた彼女に幸せになって欲しい。
　足早な人たちが多い空港を駆け抜け、飛行機の見える展望デッキに出るとそこに彼女がいた。
金網に手をかけて飛行機を見ている、少し強気で負けず嫌いな彼女の 10 数メートル手前にいると彼女がこちらを振り向いた。斜めに流した髪の毛をいじりながら、見てない風に少しだけ右斜め上を見つめるいつもの顔でやってくる。
　飛行機が飛び立つ度にジェットエンジンの高い音が響く。
おかえりと言う前に強がりながら彼女が風に消されないように大声で言った。
『幸せになるために帰ってきたの』
嬉しくなって思わず彼女を見ると照れた様子で俯いていた。
　大切な人だからその人の幸せを考えることが信じることなのだと悩みながら走りながらわかった気がした。



# 夕暮れの庭

冬桐

夏の草花、小さな池、そして大きな樹木。
蝉の音、暑さと湿気が入り混じった不愉快に感じられる空気が漂う庭。
庭は手入れをしているようでしておらず、草花が自由に自分たちの栄華を誇っている。
その中でも鬼灯が一番こちらの目を引いてくる。あの朱色が、いやでも庭の中で目立ってくる。
縁側に座り、庭の栄華を眺めながらちびちびと冷酒を少しずつ口に含ませる。
庭の鬼灯に集中していると、ふわりと人の気配を後ろから感じる。

―夕方から酒とはさぞかしいいことでもあったのか

声がするも振り返らない。振り返らずともわかる、もとはこの家の家主である。
今は訳あって、自分がこの家の家主だが、前の家主はふらりと現れる。

―なに、たいしたことではないよ。
この庭を眺めていたら、ついつい酒が飲みたくなったというだけだよ

―相変わらず、手入れをしようにもできない庭だな。昔はもう少しまともに見られる、、ものだったのに

―そういうなよ。これはこれで風情というものだ。君も隣にきてどうだい、酒でも

―……君のその風流というものは理解ができないな。しかし、酒はいただこう。

隣に座り、こちらに盃を差し出す。
トクトクと酒を注ぎ、二人で庭を眺める。

―……、こう見ると、人の営みというものはこの庭のようじゃないか。
一時の花を誇り、そして枯れていく。
まるで人間の一生のようじゃないか。

こちらの言葉に薄く笑う気配がある。
しかし気にせず言葉を続ける。

―君の住んでいたこの家にいると、君のことばかり考えてね。庭を眺めると特にだ。
まぁ、君がふらりといつもこちらに来るからだろうがな

―なんだ、来てほしくなかったらいつだって言ってくれていいぞ。こちらも暇ではない。いろいろなことをしているからな

―それは言っていないよ。しかし、人に言えた話ではないな。
亡き親友が夕暮れ時にふらりと現れては酒を飲むなんて。君のほかの友人が知ったらなんというか

こちらの言葉にうっすらと微笑む。
その顔はうすぼんやりとしており、向こうから夕陽が見えていた。
その微笑みを肴に、酒を口に含む。
隣にいる親友も同じように酒を含む。

生前と何も変わらない、見慣れた動作で。

# 小さな小さなギフトとラッピング

ねむねむあくび♪

小さな手仕事。今日は紅茶

ｵﾚﾝｼﾞとｼﾞﾝｼﾞｬｰの香りは、
スッキリとした甘さ

お茶パックに詰めて、

袋の口を折って閉めて

こんな感じ。

紅茶はたくさんあるので、
銘柄が分かるように、袋を
ﾗﾍﾞﾙとして利用します。
ﾗﾍﾞﾙには、香りや味の特徴
や飲み方のﾊﾞﾘｴｰｼｮﾝ等、
重要な情報が載っています。
本でいう目次やあらすじの
様に大切なものです。

使う容器は、缶が理想
なのですが…。
空の紅茶缶が無いので、
今回はコレ。

ﾗﾍﾞﾙを貼り、完了。

うちはこの状態にして、
いろんな紅茶を気軽に楽し
んでいます。

次はラッピング♪♪

使用するのはこちら。
紅茶やｺｰﾋｰはそれ自体香りがある上、他からの匂い移りを防ぐため、袋は糊付きのﾋﾞﾆｰﾙ袋を使います。
(食品を直接入れても良い袋を選びます。)

袋詰めした紅茶を細くして
ﾋﾞﾆｰﾙ袋に入れ、袋を閉じます。

紅茶の銘柄を書いて

貼り付けます。
これを繰り返して、いろんな紅茶を袋詰め…
ラッピングは続きます。

今回はコレ

大きいので、半分に切って

一回り大きいﾋﾞﾆｰﾙ袋にｾｯﾄ。ﾋﾞﾆｰﾙ袋を使ったﾗｯﾋﾟﾝｸﾞは中身が把かって良いのですが、そのまま入れるよりも、少し飾り紙を加えたほうが綺麗です。
包装した２種類の紅茶をｲﾝ。

完成です。

本と一緒に、
愉しいお茶の時間を
すごしましょう。

# はいどろりくす、時々オイスター

平瀬とむ

やわらか青が　そっと抱くだけ
やがて忘れてしまうでしょうか
こんなに優しい青い白

天使でも住んでいそうだ
あたたかい晴天とふわり雲
心の中　まるで
サイゼリアの天井みたい

ラムネのように溶けてゆく
呼吸も孤独も、誰かの涙でさえ
朝が来て
ただの光に変わる前に
私はそっと残していく
腕の中
こぼれ出るひと粒を

むなしかっただけの魔法を全部あげる

睨んだ景色はたいてい
なんでもない色　白いお日さま
つまんない

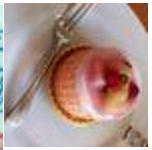
思いがけなく愛してくれなくちゃ　　いや。

うしろからつつんだ
つめたいつめたいそのからだ
その不完全を私は喜んだ
私の熱で出来てしまえ。

日に日に痴呆が進みゆく
活発な夏空

目の前が　どんなに歪んで見えても
この朝日は君のもの

目を閉じて
きみはきみであれ





BONJOUR

『四つ葉のクローバー』

「大好きな音楽に出逢えて、本当に良かった♪」と実感した曲。人との出逢いもそうだが、数ある中から見つける四つ葉のクローバー、ぜひ大事にしたい。

〝本当に大切なことは
幸せだと思える気持ち〟

A Tree of Happiness filled with Delight and Pleasure.

『さよならメランコリー』

夏にピッタリのアップテンポかつ爽やかなナンバー♪ 清涼感のある炭酸飲料水のような曲で、涼しく爽快な気分に♪

〝全てを手にして生まれるものよりも
育むことで授かる光を真実へと〟

☆お気に入りのフレーズ☆
〝だからね さよならメランコリー〟

《信政 誠》 ～Nobumako～

(のぶまさ まこと)

愛称：〝のぶまこ〟

神戸で活躍するシンガーソングライター♪
甘くて切ない透き通った歌声で、ファンを魅了♡
ギターやピアノの優しくて美しいメロディーと共に、
リスナーの心にそっと寄り添ってくれる☆
そんな癒しの音楽を届ける〝のぶまこ〟の
インフォメーションはこちら⇩
Official HP: http://www.nobumako.com アンダー
Twitter: @nobumako_jp

Piece of Happiness & Music

『頼りないヒーロー』

落ち込んでいるときや、心が疲れているときに聴くと、凝り固まった心が徐々に解けていき、ホッとした後に励まされる曲。

〝こぼれ落ちる雫を 拭うことは出来ても
君を苦しめる涙の理由を
消し去ることなんてできない
頼りないヒーローだけど
そばにいるよ
精一杯で
支えよう〟

『スカイブルー』

ライブで聴いて、涙腺が崩壊した曲。将来に対して言い知れぬ不安を抱き、ガチガチになっていたときに、フッと肩の力が抜けた大切な曲。

〝ありのままでいい 自分らしくでいい
そんな風に 囁く声の方へ〟

MERCI

# 道尾秀介風ピノキオ

たいこ

「おじさん、僕、家に帰りたいよ。お願いだよ、おじさん…」
　ゼペットは目が覚めた。悪い夢を見ていた。全身にびっしょりと汗をかいている。伏せていた机の上には製作途中の木彫りの掛時計。どうやら作業中に眠ってしまったらしい。ふと壁のカレンダーに目を遣る。今日は、木の人形だったピノキオが妖精に命を吹き込まれた日だ。あれからちょうど十年。そして、あの忌まわしい日から二十年が経つ。

　ゼペットは孤独な男だった。愛情というものを知らず、人の愛し方もまるで分っていなかった。だから二十年前、道を歩く少年に思わず声を掛けた時、彼は、少年を幸せにできるのは、そして真に少年の父親になれるのは自分だという妙な恍惚感で胸がいっぱいになっていた。少年もゼペットの一方的な愛を受け入れてくれると信じて疑わなかった。

　ピノキオを作り上げた時、驚きと恐ろしさと、そして嬉しさで震えが止まらなかった。あの時の少年と瓜二つだったからだ。決して意識したわけではなかったが、自分でも気づかないうちに、少年の面影をピノキオに彫り付けていたのだろう。‘ピノキオ’とあの少年の名前を付けたのも、当時の記憶を強く刺激されたからだ。

　ピノキオを傍に置いておくことにはいくつもの意味があった。長年待ち望んだ家族をついに手に入れたという喜び、少年に対する償い、あのことをいつまでも忘れないようにという自分への戒め。ゼペットは今も覚えている。ピノキオに触れる度、話すたびに思い出す。二十年前、自宅に帰りたいと大声で泣き叫んだ少年の首に咄嗟に手を掛けたあの痛みを。これまでの自分の惨めな半生を全て否定した少年の叫び声は、今もこれからもずっと、ゼペットの胸を抉りつづけるだろう。

　再びカレンダーに目を遣る。あれから二十年。この国の法律では、今日、ゼペットの犯した罪はすべて消える。ゼペットは思う。何かが変わるのだろうか、と。少年を死なせてしまってから最初の十年、ゼペットは暗闇の中をかろうじて生きていた。ゼペットには何もなかった。しかしピノキオに出会ってからは違った。ピノキオと二人三脚で人の道を知ってゆく道程で、ゼペットは人を愛するという事を知った。人を愛する事の喜びや苦しみを知った。守るべき存在を得ることで孤独を知った。絶望を知った。そして、あの少年や彼の家族が見たであろう、深い悲しみを、痛みを思った。
これからの歳月はどうだろう。少なくとも自分の犯した罪が露見することを恐れる日々からは逃れられるのだろうか。ピノキオの純粋な瞳を、正面から見つめられるようになるのだろうか。

　「ただいま」と若い声がした。ピノキオが学校から帰って来たのだろう。この十年、自分を生み、育てた老人の善意を疑うことなく生きてきた青い声がする。ゼペットは慌てて思考を中断する。悟られてはならない。過去の自分を微塵も感じさせてはならない。ゼペットは一度だけ深呼吸して言った。この十年間毎日のように言い続けてきた科白を。
「おかえり、ピノキオ。」

# 『相馬の古内裏』立体パネル

皆さん、この絵は一度は観られた事あるのではないでしょか？ 歌川国芳『相馬の古内裏』です。立体になってるのが元の絵とマッチしてます♪
久しぶりにカッターやボンドを使いましたが、組み立てているうちにテンション上がって、気が付いたら数時間があっちゅー間でした(笑)

画集ももちろんですが、本を取る時、好きな作品が本棚にちょこっと置かれてるのにふと気付く。
これもステキー！　初参加ですが、何かを作るという忘れかけてた事のきっかけにもなりました！

cockroach's garten

# 「内の理想、外の理想」

たわわに実った思考の果樹園を、ずかずかと入り込んでは、見るも無残な荒寥たる姿に変容させる悪党がいる。

私はみすぼらしくみえる果樹園から僅かばかりの叡智を精神に針を逆立て、探る。未知の実には悪党すら知らない甘美な味が濃縮されているだろう。彼らはそれを永久に知れない。

もしかして、それは私が長年追い求め、縋った内なる理想。

淡い期待が体中に充満する。愉悦に赤らんだ想像が狂喜乱舞の音頭を奏でて私を舞い上がらせる。

ならば、踊れ！お前も枯れ果てるがいい！全ては徒労に終るのだから。

怒声のような勢いの言葉が脳裏から叫ぶ。私はそれを感じた。悪党になびいた正気の淡心（あわごころ）が精神を凍えさせたのだ。悪寒に近い不吉な寒気を漂わせて、地に足をつけるように迫って来る！

精神が哀しみ、揺らぐ。しかし、今も信じ、私は捜す。

夏休みが始まった。ヒデヨシ、君にに会いに行こう。
アタゴオルに住む、君に元気を分けて貰おう。
四万温泉まで出かけたが、それ以上、北に向かう
体力が残っていなかった。残念。鉱泉はお腹に効いた。
空気は綺麗で、緑はしっとりしていた。
お薬師様を祀るお湯にも入った。肌がすべすべ。
息苦しかった胸の痛みも少しずつ取れていく感じ。
暑い湯気は、喉にも肺にも良かったみたい。
吸入をするってこんな感じだったかも。
自然は大きな病院みたい。癒されるってホントだね。

大阪に帰って少し元気になったので仕事に戻った。
毎日暑くて、関東での休日は夢のよう。
本の中のヒデヨシも「暑いのよう！」と叫ぶけれど、
好きな物を食べ、好きなように暮らしている。
自由でいいなあ。憧れちゃう。ぐうたら猫冥利。
定年退職したら遊ぶぞって思っていたけれど、
それまで気力体力が持つかな、ねえ、向日葵？
山にも空にも笑顔が広がっている。でも、町には？
職場には、仕事には、何も見つけられない。
独りよがりかも知れないけれど、毎日が灰色だ。

ヒデヨシ、体型は似てるけれど、私、アタゴオルまで
行けそうにない。いつまで経っても、そこへは。
ご先祖様の地は、アタゴオルよりもまだ北なのに、
そこに行き着く資格さえも、失ってしまったみたい。
昔は、入道雲に貰ったコーヒーカップでひんやりした
夏の飲み物を作り、花の中に沢山の妖精を見つけた。
背丈より高いトウキビは甘く、桑摘みの背負子は大きく、
コロボックルに会った気がした、あの夏の日だよ。
堤の向こうに渡って、せせらぎを眺めれば、世界は
穏やかで静かで優しい。

でも、もう歩くのに
疲れてしまった。
都会のアスファルトは
草鞋では歩けない。
歩く時間も無いんだ。
ほんと不健康だよね。

ヒデヨシ、君に会えるかどうか　わからないんだ。
もう、君を見つけられるかどうか　わからないんだ。
嬉しくなったり哀しくなったり、大丈夫だと思ったり、駄目だと感じたり、
当たり前の心の揺れ幅が随分小さくなって、縮こまったような気がする。
家の中にはモノが溢れている。使うのか使えるのかもわからない。
このゴミの山をどう片付けていいかわからない。要るのか要らないのか、
考えるのも疲れるくらい、沢山のモノ。でも、大切だと思っていた本も、
本さえも疲れてしまう、読めなくなってしまった。音楽も遠いんだ。
何もかもスイッチを入れるのさえ、スイッチが何処にあるのかさえ、
わからなくなってしまって、困っている。
ほら、空が遠い。 でも、月夜の電信柱のように、何かが、
何かが伝わってくるかも知れないね。
ヒデヨシ、君に手紙を書くには初めてだ。
なのに、ちょっと落ち込んでいて御免ね。
ヒデヨシ、君の住んでいるアタゴオルの空気は、どれほど胸に染み渡るだろう。

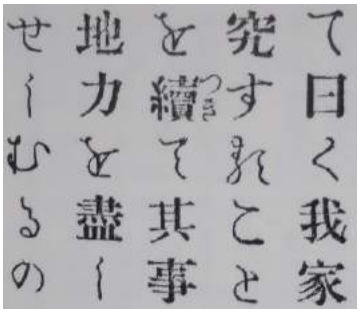
残暑お見舞いなんて関係無いくらい、雨が続いているらしいね。少し羨ましい。
ヒデヨシ、一緒に魚釣りをしたり冒険の旅に出たりしたかったな。
それじゃね。neimu（寧夢）

# 日 本 の 活 版 印 刷

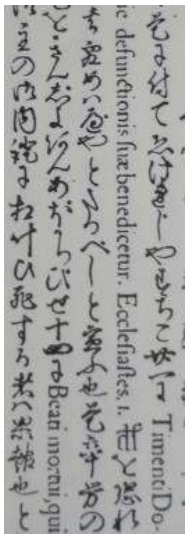
コットン

- 日本語の印刷の歴史は 1590 年代からの木活字印刷が始まりとされている。(キリシタン版や伏見版など)
  下図：キリシタン版『きやどべかどる』は和欧混植
- (江戸時代)1600 年代～1800 年代半ば製版印刷(刻工が版木を彫る)と少部数出版の近世木活字本(木活字を組み合わせて作り、思想性を帯びた公に出版できない本など)があった。
- 1800 年代前半から中国沿岸部及び欧州で金属活字は製造されていた。
- 1867 年にヘボン式ローマ字表記法で有名なジェームス・カーティス・ヘボンが和英・英和辞書の『和英語林集成』を出版した。
- 上海美華書館のウィリアム・ギャンブルが本木昌造らに 1869 年 11 月から 4 か月にわたって活字印刷や電胎法（電気めっき）の講習を行ったことが、日本の近代的な金属活字の出発点になった。
  この講習に参加した人々の中には勧工寮(後の大蔵省印刷局)の人達もいました。
- 本木昌造らが日本語に不可欠な仮名を装備(和様)、東京築地活版製作所をおこし活字を販売。
  (ひらがなは連続して書かれる連綿体で、正方形の中に一字ずつ書く発想も経験もなかった。)
- その活字を購入し、自らの活字にしていく動きが出て
  その主たるものが秀英舎(現在の大日本印刷)の活字となり
  二大潮流と呼ばれる。他にも大鳥啓介、島霞谷、木村嘉平
  などがいる。
- 写真植字や DTP などが出現し現在
  の活版印刷は名刺・はがきの印刷
  業者ぐらいとなる。

ヘボン博士
『和英語林集集』



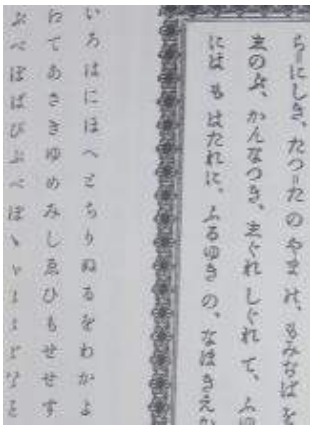
四号明朝と和様



キリシタン版
『きやどべかどる』

明治 36 年の東京築地
活版製作所の見本帳

明朝体　左 1820 年一番～右 1946 年
明朝体の変化をまとめたもの。



東京築地活版製作所　築地体
前期 5 号仮名(右)と後期 5 号仮名(左)


参考文献：

『日本語活字ものがたり 草創期の人と書体』　小宮山博史

『真性活字中毒者読本』　小宮山博史、府川充男、小池和夫

『活字印刷の文化史』　小宮山博史、内田明ほか

『組版／タイポグラフィの廻廊』府川充男、小池和夫、小宮山博史、日下潤一ほか

『文芸研究 123 号　近代活版印刷史について　—1980 年代末からの研究をたどる——』井内秀明

# 編集後記

もう『ジンジンするZINE』を編集するのも５回目かと思うと感慨深いものがあります。
常連の方々のバックアップと新しい人の新しい風と何より愛読して頂いている皆様のご感想に支えられています。（褒められるのが大好物だったりします。）

高一の時、ふらりと書店に入り当時としては変わった題名だった『僕は散歩と雑学がすき』(植草甚一)を購入したり、『話の特集』や『宝島』を読んだりしたのが今に繋がっているのかもしれない。
今後とも、よろしく～♪



★『ジンジンするZINE5』
作品提供：お気に入りの皆様　編集・発行：コットン
Copyright（C）ジンジンするZINE